

# 九州ルーテル学院大学

## Teaching Portfolio

### 2026



所 属： 人文学部心理臨床学科

---

名 前： 和田 由美子

---

# 九州ルーテル学院大学 ティーチングポートフォリオ

作成日：2026年5月29日

教員氏名：和田 由美子

所属：人文学部 心理臨床学科

## 1. はじめに

ティーチング・ポートフォリオとは、自らの教育活動を主体的に振り返り、言葉で再構築し、シラバスや教材、学生アンケートなどの多様なエビデンスで成果を裏付けてまとめた「成長の履歴」である（栗田, 2009）。九州ルーテル学院大学では2020年度から専任教員にポートフォリオの作成・更新が義務づけられており、今回の更新では2023年度から2025年度にかけての自分の教育実践の振り返りを行った。

2020年度は、新型コロナウイルスの影響で急遽オンライン授業に移行し、学習環境や教材整備に試行錯誤を重ねた期間であった。2021～2022年度には、感染状況に応じてオンラインと対面を組み合わせるハイブリッド授業を実践しながら、効果的な授業設計のあり方を模索した。ほぼ全面対面に戻った2023年度以降は、学生の日常生活が復活する一方で、オンライン経験を経た学生たちの学びへの期待が大きく変化した。単なる知識伝達はオンラインで十分と考える声が増え、対面授業には討論や実践的活動、学生間交流といった新たな価値提供が強く求められている。このような変化を受け、教育の質をどのように高めていけばよいのか。過去3年の自身の教育実践を振り返ることで課題を整理し、今後の教育改善につなげたい。

## 2. 教育の責任

私の専門分野は基礎心理学であり、心理学の基礎科目を中心に心理臨床学科の専門教育科目を担当している。大学院人文学研究科で心理学研究法の授業を担当している。その他、学部心理臨床学科のアドバイザーとして学生の各種相談に応じている。認定心理士（一般社団法人日本心理学認定）の資格取得の指導のほか、2024年度からは、学生の心理学の知識定着を目指して心理学検定（一般社団法人日本心理学諸学会連合認定）の学内団体受付を開始し、1月に課外での心理学検定対策講座を実施している（2025年度は6コマ中4コマ担当）。また、臨床心理系の教員と共同して課外での心理系大学院受験対策講座（毎年5月末、2月末に実施）、公認心理師国家試験対策講座（2月実施）の一部を担当している。

### (1) 授業科目の担当

2023年～2025年度の3年間の担当科目は以下のとおりである。

科目名	開講年度時期	履修者数	備考
フレッシュマン・ゼミ	2025年度前期	23名	アドバイザークラスを担当

心理臨床学の基礎	2025 年度前期	72 名	共同担当
心理臨床学の展開	2023-25 年度後期	62-72 名	共同担当 (1 コマ)
心理学概論	2023-25 年度前期	64-71 名	石坂昌子准教授と共同担当 (13 コマ)
学習・言語心理学	2023-25 年度前期	44-68 名	
神経・生理心理学	2023-25 年度前期	38-69 名	旧：神経・生理心理学 I
心理学研究法	2023-25 年度後期	39-64 名	
心理学実験	2023-25 年度後期 (2 コマ連続:30 コマ)	35-52 名 2 班で実施	久崎孝浩教授と 1 班ずつ担当
教育心理学 (心理)	2025 年度前期	56 名	
心理学外書講読 II	2023-25 年度後期	14-32 名	
人間科学研究実習	2023-25 年度前期 (2 コマ連続:30 コマ)	7-15 名 2 班で実施	旧：心理学研究演習 久崎孝浩教授と 1 班ずつ担当
特別研究	2023-25 年度後期	6-8 名	
卒業研究	2023-25 年度通年	6-8 名	
心理学研究法 (大学院)	2023-25 年度前期 (8 コマ)	5 名	久崎孝浩教授と共同担当 (4 コマ)

## ■ 主要授業科目

### 「心理学概論」

心理臨床学科 1 年次の必修科目であり、公認心理師および精神保健福祉士の受験資格取得に必要な指定科目でもある。感覚と知覚、学習と記憶といった基礎的な心理過程の理解は、心の健康増進や心理的アセスメント、支援活動の土台をなす重要な要素である。本講義では心理学の基礎から応用までを広く概観しつつ、人間の心の働きを体系的に学ぶとともに、これらの学修を通じて、自己と他者を客観的に観察する力を養い、人間理解を一層深めること目的としている。心理的支援に関する単元 (2 回分) については、専門性の観点から、公認心理師・臨床心理士の石坂昌子准教授に講義をお願いしている。

### 「特別研究」

卒業研究に向けて必要なジェネリック・スキルを身につけるため、心理臨床学科 3 年次でこの科目を必修としている。少人数の演習形式で、まず興味のある心理学研究論文を読んで複数回発表し、そこから卒業研究のテーマを絞り込む。論文や関連テーマについてのディスカッションを通じて、批判的かつ真摯に研究に向き合う姿勢を養うとともに、人を対象とする研究に必要な倫理的配慮についても学んでいる。さらに、Google フォームを使ったウェブ調査や、Google Sites によるウェブページ作成を実践し、研究に役立つウェブアプリケーションの操作方法も習得している。

### 「卒業研究」

心理臨床学科 4 年次の必修科目であり、4 年間の学びを総括する位置づけにある。心理学の研究法を身につけるには、以下の一連のプロセスを主体的に経験することが重要である。まず、自らリサーチクエスチョンを設定し、文献調査を行ったうえで実行可能な研究計画を立案し、

次に、データの取得と分析を経て結果を整理して、リサーチクエスチョンに基づいた考察を行う。本科目では、学生がこの全工程を自ら実践し、得られたデータを分析して問いに答える研究を強く推奨している。加えて、研究成果を他者にわかりやすく伝えるためのプレゼンテーション技法の習得にも力を入れ、指導を行っている。

学部での教育以外の教育実践は以下のようなものがある。

#### ■ 模擬講義

##### 「心と行動の個人差はなぜ生じるのか」

九州ルーテル学院大学オープンキャンパスの参加者に対し、性格の違いを説明するために、「認知スタイルの違い」と「脳の覚醒状態の違い」という二つの視点を用いる考え方を紹介した。(2024年8月24日 於：九州ルーテル学院大学)

##### 「やる気の仕組み」

九州ルーテル学院大学オープンキャンパスの参加者に対し、内発的動機づけと外発的動機づけ、先延ばしの仕組みなどの説明を通して、やる気の仕組みについて解説した。(2025年8月23日 於：九州ルーテル学院大学)

##### 「心理学入門-心のふしぎをのぞいてみよう-」熊本中央高校

熊本中央高校の校内進路ガイダンスにおいて、心理学の各分野においてどのような研究が行われているのか、心理学を勉強すると何が身につくのか、心理学を活かせる仕事の例について紹介した。(2026年3月17日 於：熊本中央高校)

#### ■ 非常勤講師

##### 「比較心理学」(～2025年度)

福岡県立大学人間社会学部人間形成学科において前期集中講義を担当している。比較心理学は、ヒトを含む様々な動物種の行動とその背景に存在する心的過程(感情、知覚、学習、認知等)を観察・比較することによって、各動物種における心と行動の独自性と共通性が「なぜ」生まれたのかを解明しようとする学問である。本講義では、進化論と遺伝学の基礎について概説した後、様々な動物種の心と行動を比較し、主に進化的観点からの解説を試みている。

## (2) 教育組織運営

担当教員として授業運営および学習指導に従事するとともに、2025年度入学生(現2年次)のアドバイザーとして履修相談や進路相談をはじめとする学生の各種相談に随時対応している。2022～2023年度には心理臨床学科長として、教員および事務組織との連絡調整を通じて学科教育の円滑な実施に努めた。2024年度からは、副学長(教務)および教務委員長として教務課と連携し、教育関係業務の調整や関連規程の整備を進めることで、教育実践環境の整備に努めている。また、外部講師を招いて学内FD・SD研修会を企画・実施し、全学的な視点から教育改善を推進している。

### 3. 教育の理念

私が専門とする基礎心理学では、人間の心と行動のメカニズムを科学的に解明することを目的としている。人間の行動原理についての基本的な基礎的な知識や考え方を学ぶことにより、人間や社会を多角的な視点で理解し、幅広い視野で課題に取り組む力が身につく。また、基礎心理学の研究体験を通じて、「データや行動を丁寧に記録し、事実を正しく把握する姿勢」、「結果をそのまま受け入れず、多角的に検討する習慣」、「日常の疑問を深めようとする意欲・好奇心」が身につく。これらは、日常生活、社会生活を送る上で必要とされる「ジェネリック・スキル」でもあり、大学4年間の心理学教育・研究活動を通じて、学生がこれらのスキルをしっかりと伸ばしていけるようサポートしている。

#### (1)理念1 既存の知識の体系的な理解

科学的に人の心と行動を解明するには、まず先行研究を俯瞰し、その成果と限界を正確に把握することが出発点となる。Google Scholar の「巨人の肩の上に立つ」という言葉にあるように、既存の知見を土台に未解明の課題を洗い出して初めて、新たな発見が可能になる。そのため、心理学の基礎理論だけでなく、神経科学や統計学などの関連分野の基礎知識の修得も欠かせない。既存の知識の修得は退屈に思えるかもしれないが、ここをおろそかにすると後の学修や研究活動に支障をきたす。

#### (2)理念2 新たな知を産み出すための方法論の理解と実践

大学での学びの醍醐味は、自ら新たな知を生む研究活動に携われる点にある。とくに心理学では、実験法、質問紙調査法、観察法、面接法といった多様な方法論に基づいて心理・行動データを収集し、統計学的手法で分析する技術を修得できる。また、先入観や価値判断をいったん脇に置き、データを多角的に吟味する科学的な姿勢は、大学卒業後の日常生活や社会活動においても大いに役立つと考えられる。

#### (3)理念3 未知の領域に挑戦しようとする探究的態度の涵養

未知の現象を「知りたい」「理解したい」という知的好奇心は、研究のみならず、大学卒業後の日常生活や社会活動を牽引する原動力になる。そのため、人間の心と行動に関する学生の素朴な「なぜ」「どうして」という疑問を大切にし、一見学術的ではないように見えるテーマについても心理学的視点で掘り下げてみることを推奨し、多面的・多角的な探究心を育成している。

### 4. 教育の方法

教育理念との関係では以下の点を重視した教育方法を取っている。

#### (1) 知識教授型授業による既存知識の効率的な修得

近年、詰め込み型授業の問題点が指摘され、グループワークやディベートを導入した主体的

な学びが推奨されている。一方、当該領域に関する一定の体系的知識がない段階では、主体的な学びが困難であることも事実である。そのため「神経・生理心理学」に代表される知識修得型の科目では、では、必要な知識の修得に重点を置き、毎回授業後に復習問題を課すことで知識の定着を図っている。さらに、小テストやフィードバックを通じて理解度を確認し、つまづきを早期に解消するよう心がけている。

## (2) 体験的・実践的な学び

研究の方法論を理解するには、まず自分でデータ収集と分析に取り組んでみるのが大切である。「心理学実験」「心理学研究法」で基本的な方法論について学習した後は、「人間科学研究実習」や「特別研究」などの実習・演習系の授業を通じて、「卒業研究」の前に学生が自ら研究実践を積む機会を設けている。

## (3) 研究テーマの自由な選択

本ゼミでは、学生自身が心から「知りたい」と思えるテーマで卒業研究を行うことを尊重している。在籍する学生の多くは大学院に進学せずに就職するため、この卒業研究がおそらく最後の「本格的な研究機会」となる。だからこそ、教員自身の専門領域という枠組みに学生を当てはめることはしていない。

心理学という学問においては、自らの強い思い入れがあるテーマに向き合うことこそが、能動的な研究スキルを習得するための最大の原動力になる。たとえ難易度の高い課題に挑戦した結果、学術的な完成度が発展途上で終わったとしても、それは決して失敗ではない。自分の関心に基づいて仮説を立て、データを集め、客観的に分析するプロセスそのものに、心理学研究の本当の面白さと奥深さが詰まっている。これらの経験は、大学を卒業し、異なる道を歩む学生たちの未来においても、課題を乗り越える確かな力になると信じている。

## 5. 教育改善のための努力

### (1) 改善努力1 「心理学外書講読Ⅱ」授業評価アンケートより

この授業では心理英語を読みこなす力をつけるために、心理学概論の英語のテキストを精読している。2024年度まではテキストの指定箇所の訳文を提出させたり、1文ずつ学生に割り当てながら訳文の検討を行ってきたが、2025年度から指定箇所の訳文検討をペアに割り当て実施し、訳文を解説してもらう方式に変更した。また、基本英文法の理解を促進するために、心理用語の単語テストに加え、基本英文法テストを毎回実施し、解説を行うこととした。

その結果、授業評価アンケートの得点は、「④理解しやすいように教え方が工夫されていた」で4.50（前年4.39）、「⑦グループワークやディスカッションの機会があった」で4.75（前年：3.17）、「⑩全体として、この授業はあなた自身に役立つものでしたか」で4.75（前年：4.56）に向上し、授業改善の効果が確認された。

### (2) 改善努力2 「神経・生理心理学」授業評価アンケートより

「グループ活動を取り入れてほしい」という学生からの要望を受け、2024年度にはグループワークを中心とした授業回を設けた。その結果、授業評価アンケートの「⑦グループワークやディスカッションの機会があった」の評価は2.50から4.26へ向上した。さらに2025年度にはグループワークの内容を見直し、高次脳機能障害の症状と関連部位についてグループごとに分担して調査・発表する活動を実施した。その結果、「⑦グループワークやディスカッションの機会があった」は4.26から4.46へ、「⑩全体として、この授業はあなた自身に役立つものでしたか」は4.33から4.62へ向上し、授業改善の効果が確認された。

## 6. 教育の成果・評価

直近の2025年度の授業評価を見ると、全体として概ね平均的な評価を得ており、授業は一定の水準を満たしていると考えられる。これまで、「グループワークやディスカッションの機会があった」の項目では低い評価を受けることが多かったが、学生からの要望を踏まえてグループワークを段階的に導入・改善した結果、評価は着実に向上した。

また、2023年度の「神経・生理心理学」の授業評価において「スライドの文字が多い」との指摘があったことから、2025年度に「神経・生理心理学」および「学習・言語心理学」のスライド構成やデザインの改善に取り組んだ。その結果、両科目とも授業評価の得点が全体的に向上した。

以上のような授業改善が評価され、2025年度には教育実践奨励賞を受賞することができた。

## 7. 今後の教育に関する課題と目標

コロナ禍以降、対面授業に対する学生のニーズは変化しており、特にグループワークやディスカッションなど、学生同士が相互に学び合う対話的な学習機会への期待が高まっている。一方で、グループワークに十分な時間を確保すると、国家資格取得に必要な知識を講義する時間が不足するという課題もある。

この課題に対応するため、知識の習得と対話的な学びを両立できるグループワークの在り方を検討していきたい。また、知識習得に関する内容は事前にオンラインで学習し、対面授業ではグループワークやディスカッションを中心に行う「反転授業」の導入も有効であると考えている。

さらに、近年のAI技術の急速な発展を踏まえ、アクティブラーニングにおけるAIの活用についても検討を進めていきたい。AIを単に解答を得るためのツールとして利用するのではなく、学習内容の理解を深めたり、多様な視点から考察したりするための支援ツールとして位置づけ、適切な活用方法を模索しながら教育実践に取り入れていきたい。

### 【根拠資料】

- ・心理学外書講読Ⅱ 2024 授業評価.pdf
- ・神経・生理心理学 2024 授業評価.pdf

- ・心理学外書講読Ⅱ 2025 授業評価.pdf
- ・神経・生理心理学 2025 授業評価.pdf